



恋鬼

身代わり花嫁の純愛

楠田雅紀

Masaki Kusuda

松本一個

Shiko Matsumoto

CHARADE
Pearl
LABEL

恋鬼

～身代わり花嫁の純愛～

楠田雅紀

C O N T E N T S

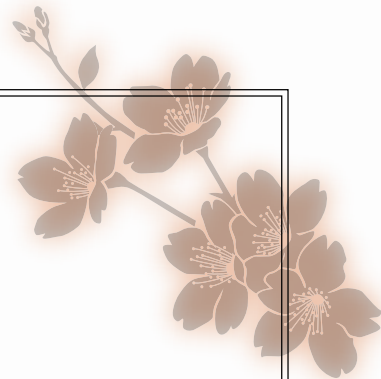


恋鬼 ～身代わり花嫁の純愛～

ミニラフ画集 ④ 松本一個

あとがき

恋鬼
く身代わり花嫁の純愛く



時は、平安の時代から源平あい争う戦乱の世へと向かう頃。
 場所は、京の都の遠く、山また山を越えたさらに奥の、小さな村々がそれぞれ田畑を耕すところ。

ふたりの若者がいた。

ひとりは志高く、気高く、そして優しかった。ひとりは機智に富み、逞しく、そしてやはり、優しかった。

「冬嗣様」

「輝明」

「……冬嗣様、この手はなんですか」

「愛しいそなたを覆う邪魔な衣を剥ぐ手だよ」

「……冬嗣様、その輝く瞳はなんですか」

「愛しいそなたのよく変わる表情を、見落とさぬための瞳ではないか」

「……冬嗣様、そのお腰の……あああ！ お、お待ちください！……待てつてば！」

「許せ。これもみな、愛しいそなたがあまりに愛しいゆえなのだ」

「く、口ばかりうまくなって……あつ……」

「うまくなったのが口だけとは心外な。……やはりわたしはまだ精進が足りぬのか？」

「……いえ……もう十二分に……ああ」

今は昔、男ありける――。

* * *

川面^{かわも}を渡る風が心地^{こち}よい。川の水で顔を洗い、喉^{のど}を潤し、輝明はほうっと人心地^{こころ}ついた。岩のあいだを奔^{はし}る流れは速い。郷^{さと}を囲む山々から集まった水が奔流となった清流は、時に鉄砲水となつて川辺にいる者をさらうが、豊富な水量のおかげでこの莊園では田畑の水に不足したことがない。

今日は兎^{うさぎ}を三羽も仕留めた。歸りに、昨日岩陰に仕掛けた罠を見に行こう。もしかしたら鮎^{あゆ}が捕れているかもしれない。輝明は山を駆けて疲れた足を草鞋^{わらじ}ごと川の流れにひたした。ほっそりした脚を水に洗わせながら、ちゃぷちゃぷと川面を蹴^ける。

田畑での仕事より弓矢を持つて小動物を追うほうが好きな輝明に、父母は顔をしかめる。地道な畑仕事を好かず、野山を駆け回ることに熱心な次男が心配なのだ。

長男の豊丸^{とよまる}も妹のキヨも、両親を助けて進んで田や畑の世話をする。輝明は真面目^{まじめ}なふたりを偉いと思う反面、ふたりが、特に兄ががんばってくれているのだから、自分ひとりぐらいは勝手^{しょうず}をしても許されるんじゃないかとも思っていた。

獣の、特に兎や狐^{きつね}のような毛の柔らかい獣の皮は、年に数回訪れる行商人に高く買ってもらえる。今度行商人が来たら、ためてある兎の皮を売って、代わりに綺麗^{きれい}な衣^{きぬ}をキヨに買ってやろう。豊丸には新しい水干と袴^{はかま}でもあつらえてやろうか。——いや。そういえば豊丸は最近夜になると忍び出ていく。これはもしかしたら、嫁取りも近いのではないだろうか。ならば、祝

いとして取っておいたほうが……。

あれこれ考えながら輝明は立ち上がると、弓矢とくくつてある兎をかつぎ直した。輝明が仕留めた獣の皮が高く売れるのは、身にはほとんど傷をつけず、頭部ばかりを射抜くからだ。もう十六歳になるというのに、十四の妹のキヨと身の丈も幅もあまり変わらず、少し重いものを持てばふらついてしまう輝明だった。が、弓矢を持てば誰より遠くまで正確に矢を放つことができ、山道を駆けるのも誰よりも速い。

父・茂豊しげとよも兄も、もし戦いくさがあれば輝明はさぞ手柄を立てるだろうと言ってくれるが、幸いなことに輝明たちの住む郷はここ数十年、戦の騒乱にさらされたことがない。世が乱れるにつれて、刀や槍やりで武装した荒くれ者たちが各地の莊園を荒らしにくという話をよく聞くようになったが、山と山に囲まれてはいるが田畑の恵みの絶えないこの地が狙ねらわれることはない。

それは――。

輝明は谷間の向こうの山やまひだ麓を見つめた。山の中腹あたりに築地をぐるりとめぐらせた館が建っている。檜皮ひわだぶき葺の屋根がゆるやかに反って、寄棟の形に三角を描く。その館には京の高貴な公家くげの血を引くという花山院家かさんのいんが代々住んで、この莊園を治めている。今のご領主様が何代目のなんというお殿様なのか輝明は知らないが、「花山院様」がいらっしゃる限り安泰なのだと子供の頃から聞かされてきた。この地は「花山院様」によって守られているのだと。

ただ、守られている代償として相応の犠牲は払わなければならない。そういえば、と輝明は記憶を探る。一昨年は川向こう

の村だった。去年は隣村。今年あたり、そろそろ輝明の村の順番ではないかともつばらの噂だが……。

「くわばらくわばら」

雷除けのまじないを口にして、輝明は家路を急いだ。

だが、雷除けのまじないでは災厄除けにはやはり効果がなかったか。

「ただいまあ！ 今日は大狸でさあ……」

輝明が家の土間に飛び込むと、父も母も兄も妹も暗い顔で座り込んでいた。まだ日没まで間があるのに全員が家に戻っているというのは珍しい。しかも、母と妹は互いの肩に顔を埋めるようにして泣いているではないか。

「……ど、したの。なんか、あった？」

「輝明……」

兄の豊丸が顔を上げたが、その顔にやはり生気がない。

とりあえず兎と鮎を土間の隅に置き、輝明は板の間へと上がった。

「どうしたんですか。なにがあったんですか」

あぐらをかいて、額を押さえている父親の前へとにじりよる。

「……今日の昼……村長が来てな……今年、『花山院様』のお館に上がるのは……キヨに決まったと……」

「……え……」

母とキヨの泣き声が大きくなった。

「……な、んで……どうして……」

なんでもどうしてもない。「花山院様」はこのあたり一帯を治めている莊園主だが、同時に、外敵からこの地を守ってくださっている守り神のような存在でもある。その領土に住む者の義務としてどの家も毎年田の実りの一部を納めているが、その量は決して多くない。凶作で米の収穫が少ない時には税を免除されることすらある。「花山院様」がご領主様で本当によかったと郷の誰もが思っている。だが、そのすべての代償として――年にひとり、「花山院様」にお仕えする娘を館に差し出さねばならない。

一昨年は川向こうの村だった。昨年は隣村……今年はそろそろこの村ではないかと村人は恐れていたが、それがまさか、妹のキヨになるとは……。

「ど、どして……でも、だって、キヨはまだ十四なのに……」

「知らん！」

輝明の思いはそのまま親の思いだったのだろう、輝明の言葉は父親の大声にさえぎられた。

「……仕方ないだろう。……村長のところに、ゆうべ、館からの使いが来たそうだ。……今年は、茂豊の娘キヨを館に上げらせろと命じられたと……」

「……………」

話には聞いていた。どの村のどの娘がその年、館に行かねばならないのかは、「花山院様」からの白羽の矢で決まると。輝明は膝ひざの上でぎゅっとこぶしを握った。「館からの使い」は絶対だ。

キヨは近隣の村でも評判の可愛い娘だ。くるりとした黒目に愛嬌あいきょうがあり、ぷっくりした唇となめらかな頬ほおも愛らしい。キヨと輝明は幼い頃はそれこそ瓜うりふたつだと言われていたが、笠かさもかぶらずに山野を駆け回る輝明は陽ひに焼けて、それなりに引き締まった印象に変わってきている。

キヨが「花山院様」のお目に留まり、所望されたというのは本当なら名誉なことだが……。

茂豊がふたたび額に手を当て、溜息をついた。その肩は丸く前に落ちて、一度に年をとったように見える。

当然だろう。館に上がったが最後、戻ってきた娘は今までひとりもない。娘に会わせてほしいと年老いた両親が館に出向いても、門前払いでその生死すらわからなかったという噂さえある。「花山院様」にお仕えするために館に上がるということは、そのまま、今生の別れを意味するのだ。

「キヨ……」

輝明はふらふらと立ち上がると、母親と抱き合って泣いている妹の背後で膝をついた。

「キヨ」

「テルにいちちゃん……!」

振り向いたキヨは涙でぐずぐずの顔で輝明に抱きついてきた。

ふたつちがい、仲のよい兄妹だった。遊ぶのも一緒だったし、学ぶのも一緒だった。

キヨの涙が直垂ひたたれを通して沁しみてくるのを感じながら、輝明はその細い背に腕を回した。背格好は輝明とあまり変わらなくて

も、こうして触れるとキヨは輝明に比べて骨組みも華奢きゃしゃで肉も柔らかいのがよくわかる。いくら輝明が力仕事が苦手だといつても、井戸の水を汲くめば、キヨが桶おけに二杯運ぶあいだに輝明は三杯運べる。手仕事だって、キヨのほうが不器用なくらいだ。

——キヨはまだまだ幼くて、子供だ……。

「……キヨじゃだめだ……」

輝明は呟つぶやいた。言葉に出してみると、それがまちがいないことのようにさらに思えた。

「キヨじゃだめだ」

強く、はつきりした口調で輝明は繰り返した。「え」とキヨも母親も、父も兄も顔を上げる。

「キヨがお館に上がったって、役になんか立たないよ。力だつて弱いしさあ、繕い物だっておれのほうが得意だろ？ キヨが行ったって『花山院様』はお困りになるだけだよ」

だからさ、と輝明は続けた。

「おれが行く」

「テルにいちゃん？」

「輝明？」

「なに言ってたんだ、おまえ」

「輝明、おまえ……」

それぞれに驚きの色を見せる家族ひとりひとりに、輝明はうなずいた。

「おれが行くよ。だってそうだろ？ キヨよりおれのほうが絶対役に立つんだから」

「……それは……しかし」

**この続きは製品版で
お楽しみください。**



<http://gyutto.me/>